

目的 わが国でも戦後の制度改革によって、夫婦家族制規範の重視と家族の個人主義化の傾向が強ま、てきている。そのような状況に対応して、老年期の生き方や家族関係のあり方を考える上で、アメリカの日系老人の異文化への適応状況について考察することは意義がある。本研究では、日本で教育を受けた後に種々の理由で渡米し、時には人種差別などの迫害を経験しながら、日本とは異質な社会で子供を生み育て老後を迎えるに至った日系老人の家族意識の特徴とその生活史や老後生活の実態を明らかにする。

方法 1986年9月31日から約20日間、カリフォルニア州サンノゼ市に滞在して調査を行った。サンノゼとサンフランシスコの日本町にある老人ホームおよびサンノゼ周辺地域に居住する日系人のなかから、日本で教育を受け日本語を読み書き話せる60歳以上の者を対象に、日本人の家族意識との比較を主な目的としたアンケート調査を実施し、そのうちの15人について生活史の聴き取り調査を行った。戦後初住者と子供がいない者を除いて、アンケート調査の分析に用いたサンプル数は男性25人と女性46人の計71人である。

結果 調査対象者のうち、男女とも日本生まれが6割、男性の5割と女性の4割が80歳代である。日系人社会との結びつきは強いが、日本に強い望郷の念をもつ者は少ない。夫婦家族制規範を受容する程度は日本人よりも強く、とくに夫婦の伴侶性や親密性を重視する意識が強い。だが、再婚に対しては消極的であり保守的でもある。一方、子供の生き方に干渉すべきでないしできないと考えているために、世代間の対立は少ない。子供とは別居していても頻繁な交流があり、親子の間に距離をおいた親密な関係が形成されている。